

『摂南大学教育学研究』第16号発刊にあたって

「摂南大学教育学研究」編集委員会  
委員長 吉田 佐治子

このたび、『摂南大学教育学研究』(Bulletin of Educational Research of Setsunan University)第16号が完成いたしましたので、発刊いたします。

本誌は、摂南大学教職支援センターの教員及び教職課程を履修した卒業生を中心に、教育の理論および実践的交流誌として発刊するもので、教職支援センターの研究事業として16年の歳月を刻むこととなります。

2019年は、令和という新しい時代の幕開けでした。明るい、祝賀ムードがあふれる一方で、国内外でさまざまな出来事がありました。大学での教育に関わる者として特に印象に残っているのは、いわゆる「大学入試改革」の見直しです。2020年度から実施されるはずだった新しい大学入試制度は、英語、数学、国語について、その試験方法の変更が見送られることになりました。大学入試制度に対する個人的な意見は別として、まず頭に浮かんだのは、「新しい入試制度に対応してこれまで努力してきた高校生が気の毒だ」ということでした。もちろん、大学に合格することだけが学習の目的ではありませんが、憤りを感じた人も多かったことと思います。

こどもは、自分のことを自分で決められないことが多々あります。例えば近いところでは「ゆとり世代」などと若者のことを揶揄することがありますが、いわゆる「ゆとり教育」を決めたのはこども自身ではありません。こどもは、おとなの決めたことに従うしかありません(もちろん、おとなはよかれと思ってなのかもしれませんが、また、こどもに決めさせないことがこどもにとってよい場合もあるでしょう)。理不尽だなと感じることがあります。

教職課程で学ぶ学生はやがて、こどもと直接向き合うこととなります。独りよがりではなく、こどもの気持ちや意見を尊重できる、そしてできるならば、それをおとな社会に伝えられるようになってほしいと思います。

本学の発展と共に教職課程の教育内容がますます充実していくための一助となるために、この『摂南大学教育学研究』が役立つことを願っています。

2020年1月31日